



国際交流

# Newsletter vol.6

## 加藤 正治 教授

文学研究科  
文学部 言語生態論

皆さん初めまして。数年前から国際連携室の室員をしております加藤正治と申します。私の海外滞在経験はあまり多くなく、ハーバード大学とマギル大学にそれぞれ一年ずつです。しかも正確には「留学」ではなく客員研究員の身分での「海外研修」でしたので、単位取得などの義務はなく自由に授業を聴講できました。本当の意味で留学される皆さんにはあまり役に立ちそうもない話になりそうですがどうかご容赦のほどを。

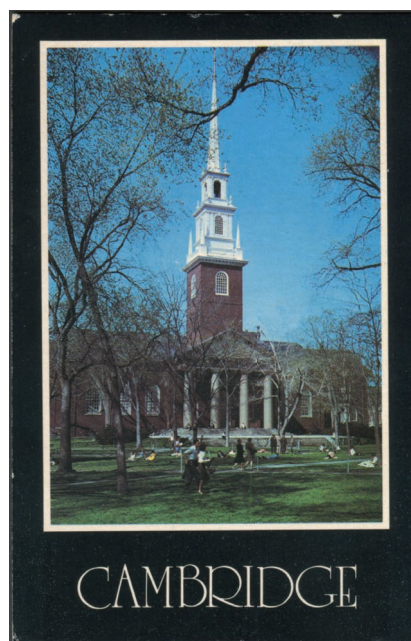
海外留学の一番のメリットは「本物の魅力」です。ルーブル美術館で本物のモナリザを見た時に経験するような興奮や感動です。ハーバードにいるときに近くにあるマサチューセッツ工科大学の高名な教授の授業を聴講に行きました。正規の学生の数よりも聴講者の数の方がはるかに多いという名物授業です。(無断で) 授業を録音し、家に戻ってノートと照らし合わせて復習するということの繰り返しでしたが、一番充実した時間でした。その経験はその時のワクワクするような感覚と共に大きな財産になっています。

視点の違いを経験することも海外留学の大きな魅力の一つです。知人のアメリカ人がスーパーマーケットで落としたハンドバッグが無事警察に届いたということがありました。警察によると拾い主は名前も告げずに去っていったそうで、日本であれば「奥ゆかしい」といった言葉がぴったりです。しかし周りのアメリカ人たちの反応は違って、バッグの中の現金がなくなっていると落とし主が訴えた場合、拾い主はそれが嘘であったとしてもその額を弁償しなければならないので、そのような面倒を避けるために拾い主は姓名を明かさないので、ということでした。日本では考えられないようなアメリカ社会の一面を垣間見た出来事でしたが、同時に、同じ現象でも見方を変えると実態ががらりと変わったものになるということを実感した出来事でもありました。

物事の本質を見極めることに気付くということもあると思います。マギル大学にいた時の話

ですが、大学のあるケベック州は Anglophone (英語使用者) と Francophone (フランス語使用者) とが混在する場所で、英語とフランス語両方が用いられています。現在の状況は分かりませんが、当時は Francophone が州の政権を握っていて、フランス語優先策がとられていました。物の名前や表示はフランス語で書き、英語と併記する場合にはフランス語が先に書かれ、英語だけのものは許されていませんでした。ずいぶん理不尽な政策のように思われますが、実は「このままでは自分たちの文化の象徴であるフランス語が近い将来英語に取って代わられてしまう」という Francophone たちのアイデンティティの問題が背後に隠れています。裏事情に目を配ると本質が見えてくることに気付かされた出来事でした。

最後に一言。留学先の教員のサバティカルにはくれぐれもご注意を。皆さんの留学が有意義なものになりますよう祈っております。



Harvard Memorial Church の絵葉書

## 文学研究科・文学部 国際連携室

国際連携室では、年間を通じて様々な行事や企画を実施しています。留学生だけでなく、文学研究科・文学部の学生を対象としたプログラムもあります。2015年度には以下の行事を実施しました。

(\*は留学生のみ対象)

■ **部局間交流協定校 派遣学生募集** 留学開始時期に応じて、一年に2回募集します。

**2014年度 追加募集** ①2月2日(月)～2月27日(金)、②4月6日(月)～4月17日(金)

**2015年度 本募集** 8月24日(月)～9月9日(水)

**2015年度 追加募集** ①2月1日(月)～2月26日(金)、②4月8日(金)～4月18日(月)

■ **タンデム学習プロジェクト** 留学生と日本人学生のペアでお互いの言語や文化を学びます。

前期と後期にそれぞれのプロジェクトがスタートします。

前期スケジュール 参加者募集 4月2日(木)～4月20日(月)

親睦パーティー 6月1日(月)

ワークショップ 7月3日(金)

後期スケジュール 参加者募集 10月1日(木)～10月20日(火)

親睦パーティー 12月3日(木)

プロジェクトの詳細についてはFacebook、HPをご覧ください。

Facebook <https://ja-jp.facebook.com/OsakaUTandem>



HP <http://www.let.osaka-u.ac.jp/kokuren/tandem/index.html>



■ **新入留学生オリエンテーション\*** 新入留学生を対象としたオリエンテーションです。

4月 3日(金) 博士後期課程1名、研究生19名(研究科5名、学部14名)

特別聴講学生4名(学部4名)、特別研究学生1名(研究科1名)

9月30日(水) 特別聴講学生6名(Erasmus Mundus 留学生、研究科6名)

10月2日(金) 研究生10名(研究科3名、学部7名)、特別研究学生2名(研究科2名)、

特別聴講学生16名(研究科3名、学部13名)

それぞれの開催日に参加できなかった新生には、後日個別説明を行いました。

■ **チューター説明会** はじめて留学生チューターを担当する学生を対象とした説明会です。

前期は4月15日(水)、後期は10月14日(水)に開催。

当日出席できない担当者には個別に説明しました。

■ **英語研修プログラムの募集案内** 大阪大学で実施されている語学研修です。

プログラム名	募集時期	実施時期・期間
エセックス大学 夏期語学研修プログラム	4月上旬から4月下旬	8月中旬から約5週間
グローニンゲン大学 短期訪問プログラム	4月中旬から5月上旬	8月中旬から約2週間
マヒドン大学 短期訪問プログラム	5月下旬から6月上旬	8月下旬から約3週間
モナシュ大学 春季語学研修プログラム	10月中旬から11月上旬	2月中旬から約5週間

募集時期、実施時期・期間は目安

■ **留学説明会** 文学研究科・文学部学生を対象とした説明会です。

5月14日(木)のお昼休みに開催しました。学内選考や留学先大学への申請手続やスケジュール、奨学金についての説明の後、交換留学経験者の体験談を聞き、渡航準備や現地での生活だけでなく、帰国後の就学や就職活動などについての質問にも答えていただきました。

- **「ゆめ基金」応募者募集** 交換留学制度を利用する文学部学生を対象とした奨学金です。2013年からスタートしました。6月30日（火）、1月29日（金）を選考基準日として募集し、選考のうえ採用者を決定しました。

## ■ Erasmus Mundus Euroculture Programme

**派遣奨学生** 10月8日（木）に奨学生募集の説明会を開催し、10月19日（月）～11月6日（金）の期間で派遣学生を募集しました。

**特別講演** 7月17日（金） Asier Altuna-Garcia de Salazar 教授（デウスト大学）に“Representing the dysfunctional family of the “other” in Ireland through the multicultural and transcultural prisms”と題して英語でご講演いただきました。  
10月23日（金） Janny de Jong教授（グローニンゲン大学）に“Past Matters? History, remembrance and nationalism in East Asia and Europe”と題して英語でご講演いただきました。

## ■ ISAP (Internationalen Studien- und Ausbildungspartnerschaft)

**特別講演** 10月9日（金） Till Knautd助教（ハイデルベルク大学）に” Counter-culture in the Japanese Student Movement”と題して日本語でご講演いただきました。

- **ランチタイム交流会** 4月17日（金）、10月23日（金） 軽食を摂りながら、学生、教職員が学期初めのお昼のひとつを一緒に過ごしました。

- **浴衣教室\*** 7月3日（金） 参加者の好みに応じて帯や飾りなどで華やかな浴衣姿に仕上げてくださいました。

- **着物教室\*** 12月2日（水） 女性は振袖を、男性は着物と羽織を着付けていただきます。好みの一着を選んで着付けていただき、思い思いのポーズで写真に納まりました。

□今年度の実施案内はHPやポスターなどでご確認ください。留学プログラムや留学派遣学生の募集情報はHPやKOANを通じてご案内します。



浴衣教室



着物教室



## 留学体験記

### イギリスで過ごした夏

日本文学・国語学専修 2年 松田 伸拓  
エセックス大学夏季語学研修プログラム (派遣時 学部2年)

「まだ帰りたくないな…」

帰国を翌日に控えた夜、フラットメイトとのパーティーで誰からともなくこの一言が漏れました。8月半ばから約40日のイギリス・エセックス大学での海外研修。長いと思っていた5週間もあっという間に過ぎ去り、なれないことばかりだったイギリスでの生活も気づけば離れがたいほどに楽しいものになっていました。

「留学に行きたい」

そう思ったのは1年生の夏のことでした。知識を詰め込むのではなく、日常的に使われる言語としての英語を学びたい、と思ったからです。とは言っても国語学を専攻するつもりだった自分にとって長期にわたる留学は必要ないのではないかと、そう思っていたときにちょうどこの研修を知りました。イギリスの大学での英語の授業、オックスフォードやケンブリッジへの研修旅行、5週間という期間…自分にぴったりのプログラムに思えました。

「英語は怖くない」

エセックス大学での授業はGrammar & Vocabulary Development、Listening & Speaking、Reading & Writingの3科目に分かれていて、事前のテストの結果に基づいてレベル分けされていました。授業と言っても、教室にいるのは10人前後。先生を含めて教室全体がとてもフレンドリーな雰囲気でした。話を聴いているだけでなく自分から発言することを求められる環境だったので、これまでにないほど英語を話すことができました。授業中のコミュニケーションを通じて、決して洗練された英語を話さなくても互いの意図を伝えることはできることを学び、英語を口にすることへの抵抗が日々小さくなっていくのを感じました。

「やっぱりまだまだ」

週末は授業がないので、大学近郊のコルチェスター市街やロンドンに観光に行って過ごしました。大学内では阪大生に出会うこともしばしばですが、大学の外は正真正銘の外国。当然英語を話すことになるのですが、大抵の場合、大学の先生方ほどゆっくりはつきりしゃべってくれる人はいません。かの有名なロンドン訛りにも出会いました。何も話せないことはなくとも、何度も聞き返し言い直しようやく会話が成り立つということも何度もありました。授業で「案外英語なんて怖くない」と自信を深め、街に出て「やっぱりまだまだ」とちょっぴり落ち込む。その繰り返しの5週間でした。

語学研修と言ってもたかだか5週間。英語力が大幅に上達するものではありません。ただ、間違いなく度胸はつきました。自分たちの英語力は（なんとか）コミュニケーションが成り立つレベルには達しているし、その域に達していればどんどん話しているのだと。より長期間での留学へのワンステップ、単純に海外に出たいから、英語を勉強したいから…理由は何であれ、この研修に参加することは必ずプラスになると思います。



オックスフォード市街の眺望

### ハイデルベルク大学への留学を終えて

ドイツ文学専修 4年 遠藤 那奈  
ドイツ ハイデルベルク大学 (部局間派遣、留学時 学部3年)

私は2014年3月から2015年2月までの約11か月間ドイツのハイデルベルク大学に留学しまし

た。大学に入る前から留学に対するあこがれはあったのですが、多額の費用がかかるのではないかと、単

位修得や就職活動の関係で卒業が遅れてしまうのではないかという不安から、詳しく調べることもなくあきらめていました。しかし、2回生でドイツ文学を専攻してからは次第に留学に対する不安よりも興味の方が強くなり、部局間の交換留学を申請することにしました。経済的な理由からどうしても4年間で大学を卒業したかったため、留学先で単位を取得することは難しいと聞いて、留学前にできる限り多くの授業を受講しました。そのころはアルバイトやサークルの運営委員もしており、いつも時間に追われて嫌になることもありましたが、無事留学を終え、就職先も決まって4年で卒業できる見込みが立った今では、あの時頑張っただけよかったと思っています。

留学先ではまず4月からの授業に備えて1か月間ドイツ語の授業がありました。学期が始まってからはドイツ語の授業が週2回になり、並行してドイツの文学や歴史の授業など興味のある授業を受講しました。はじめはなかなか授業のスピードについていけず悔しい思いをしましたが、それでも積極的に参加するよう心がけていると次第に慣れていきました。

授業のない時間には3人のドイツ人学生とタンデム学習をし、宿題や予習をしていてわからないことがあるときや、発表の準備やレポート作成に取り組んでいるときにいつも助けてもらいました。また、相手からの質問によって改めて日本の言語や文化について考える時間も増え、よい経験になったと思います。タンデム学習をする以外にも一緒にお祭りに行ったりピクニックをしたりし、仲良くなることができるとても楽しかったです。

留学して一番よかったと思うことは、やはりドイツの文化や習慣を肌で感じられたことだと思います。食事や祝日の過ごし方などのドイツで当たり前のことも、日本にはよくわかりません。それら

を実際に見ることで、文学作品を読むときに場面を想像したり、登場人物の心情を理解したりしやすくなったように思います。特に印象に残ったのはクリスマスです。クリスマス関連の商品が店に並び始める時期は日本よりずっと早く、11月末からはクリスマスマーケットも開かれてとてもにぎやかでした。クリスマスイブはタンデムパートナーの家に招待してもらい一緒にお祝いをしました。このお祝いの様子や、ドイツ人の友人たちが何週間も前から家族に何を贈ろうかと考えている様子から、ドイツの家庭にとってのクリスマスの大切さがよくわかりました。

留学に関して不安なことはたくさんありましたが、多くの方々の支えによって実現することができ、本当に感謝しています。留学をするかどうか悩んでいる人はまず色々な人に相談してみてください。研究室の先生や先輩、国際連携室の方など留学について知っている人、経験したことがある人に直接話を聞いた方が、ひとりで考えるよりも具体的なイメージができると思います。学生のうちでなければ留学するチャンスは少ないと思うので、興味のある人はぜひ挑戦してみてください。



語学学校のクラスメイトと

## 留学を振り返って

人文地理学専修 4年 上條 将吾

イギリス マンチェスター大学 (部局間派遣、留学時 学部3年)

私は2014年9月から2015年6月までイギリスのマンチェスター大学に10か月間留学をしていました。ここでは留学に至るまでの準備から渡航中の生活などを紹介したいと思います。

まず、留学を決めた理由ですが、私には将来海外で働きたいという大きなビジョンや、そのために英語を身につけたいといった目標はありませんでし

た。ただ自身の学ぶ地理学が先進的な国で刺激を受けてみたいという思いから、留学を考え始めました。もちろん大きな決断だったので迷うこともありましたが、「後悔するなら行動してからがいい」と考え、準備を進めていきました。特に私は英語を苦手としていたため、交換留学に必要な語学試験のスコアを取る所から苦勞しました。当時は部活動との兼ね合

いで、計画的に学習することの大変さを痛感した時期でもありました。それでも無事渡航への資格を得ることができ、諸手続きを進めるうちに出国を迎えました。

ひとりで海外へ出たのは初めてでしたが、良くも悪くも楽天的な性格のため過度な不安はありませんでした。初めの2か月程は学生寮や街での生活に慣れることや授業についていくことに必死で、気が付けば冬を迎えていました。特にイギリスは“グルメ”の国として知られていますが、その味にもいつしか慣れていました。また、時間が経つにつれて寮や授業を通し、様々なところで交友関係が生まれ、それと同時に時間を楽しむ余裕も出てきました。授業は難しいながらも本当に刺激的で、時に深夜まで課題に追われることもありましたが、振り返ってみても充実していて今の自分に大きな影響を与えたように感じます。また、限られた時間を最大限活用したいと思い、積極的に行動することを心掛けました。課外活動で参加した部活動やボランティアではそれぞれ学ぶことも多く、色々な所でつながりが生まれたようにも思います。個々の経験については語り切れませんが、興味を持ったことに挑戦することの面白さを改めて感じる事が出来ました。

留学で何が学べるかということに関しては人それぞれあると思いますが、私自身は自分の将来に対す

る考え方を見直すようになりました。留学へ行けば将来のことは何か決まるのではないかとこのことをどこかで期待していましたが、いい意味で迷うきっかけを得ることが出来ました。最後に、留学を終えて改めて思うのは、何か突き動かされるものがあるのなら、それに従って行動してみるほうが良いということです。失敗に終わったとしても、やはり行動した時の後悔はしなかった時よりも小さいと思います。今留学に行きたいけれども踏ん切りがつかないという人がいれば、是非挑戦してみしてほしいと思います。



Lancaster Cup

## 非英語圏という選択肢

英米文学・英語学専修 4年 大前 友香

フィンランド オーボアカデミー大学 (大学間派遣、留学時 学部4年)

英語での留学を考えると、留学先として北欧を考える方は少ないと思います。私は半年間フィンランドのオーボアカデミーに留学をし、英語で授業を受けました。この経験から、フィンランドに留学した理由と、フィンランドに留学して良かったことについてまとめたいと思います。

留学先をフィンランドに決めたのは、教育制度に関心を持っていたからです。当初は英語圏以外への留学を考えてもみませんでした。ですが、自分が留学先で何をしたいのか考える中で、「そのような教育制度を考え出したフィンランド人と直接話してみたい」という思いが膨らんでいきました。そして、最終的には、治安の良さや自然の豊かさの魅力に加え、フィンランドに長期滞在できる機会そのものが、私の今後の人生であまりないだろう、という貴重さが決め手となり、フィンランドを希望しました。

さて、実際にフィンランドに留学してみて良かったと思ったことを3点ご紹介します。まず、1点目として、フィンランド人も日本人と同じく、英語のネイティブではないという点です。彼らは流暢な英語を話しますが、ネイティブではないからこそ明確な発音で話してくれますし、こちらも気兼ねすることなく話せます。「とにもかくにも、まずは話す」という姿勢を身につけられたのは、フィンランドに留学したからだと思います。

2点目に、フィンランドの大学の特徴として、教授との距離の近さがあります。ヨーロッパの学生達も驚いていましたが、フィンランドでは教授と学生の立場が対等で、非常に柔軟な対応をしてくれます。少人数で授業が行われるため一人当たりの発言や発表回数が多くなるのですが、先生方がとても親切なので安心して発言することができ、自ずと発表にも

慣れました。

最後の3点目として、アジア人の少なさを挙げたいと思います。言い換えれば、アジア人の需要の高さです。留学生の大半はヨーロッパ人で、大学に日本人は私を含め二人しかおらず、英語漬けの日々を送ることができました。

以上の3点の中で私が特に良いなと思ったのは、最後に挙げました「日本人の需要の高さ」です。フィンランドにはほとんど日本人学生がいない一方で、日本語を学びたいフィンランド人学生は少なくありません。声を上げれば、授業の手伝いやボランティア等に挑戦しやすい環境でした。それらの活動を通じて多くのフィンランド人と親しくなり、互いの文化や歴史について話すことで、良い刺激をたくさん受けました。

私の文章が、英語圏以外の大学への留学の可能性をひろげるきっかけになれば幸いです。



Northanlights

## 美しい日本語を美しい中国語に

博士後期課程 1年 国語学 文 雪

最初に日本語を美しいと感じたのは中学一年生の頃にテレビアニメ『彼女彼女の事情』のあるセリフを聞いた時のことでした。「愛は、広がっていくものだから」というセリフです。当時はまだ日本語を学んでいないので、意味までは理解できませんでしたが、日本語のなめらかな響きは、「因为爱，是生生不息的」という中国語の字幕と合わせて、美しく伝わって来ました。後になって振り返っても、中国語はここで「生生不息」という言葉で日本語原文のニュアンスを適確に伝えていたと思います。このセリフと訳文はあまりにも印象的だったので、20年近く経っても忘れられません。

それ以来、日本語に興味を持つようになり、中学時代は独学で、学部生と修士課程は専攻として日本語について勉強してきました。職場でも日本語を生かしていました。特に翻訳に一番関心を持っています。ぴったりする訳語が見つかるとう幸福感が湧いてきます。その度に、最初に覚えた日本語とその中国語訳の美しさが蘇ります。同時に、いい訳を作り出すのにまだまだ勉強が足りないという未熟さも痛感しています。数年前から進学を計画し、紆余曲折を経て、金水先生の元で指導を受けるに至りました。

学校から一旦離れていたこともあり、再び学生生活に戻ると、素直に学問に臨むことの大切さはより

鮮明になりました。一見学術的な問題ではありますが、その捉え方及び解き方は学問以外にも通用しえます。文学研究科に入学して一年間半の間、先輩方の研究発表を拝聴し、先生方のご指摘をいただいて、自分の不足を再認識するとともに、研究者たる姿勢にほんの少しだけ近づけたような気がします。

博士課程の研究テーマにアニメの中国語字幕を選んでいきます。日本のアニメは物語として好きです。特に1990年代前後にいい作品がたくさんありました。中には大変だった時期に勇気づけてくれて、精神的に支えてくれた作品もあります。しかし、研究の視点でいうと、ストーリーよりも、セリフにみる日本語の美しさを中国語でどう表現すべきかについて研究したいのです。少々変わったテーマではありますが、どこから着手し、どう取り込むべきかについて先生方及び先輩方よりご意見をいただいたおかげで、自分の中でだんだん明確になってきています。これまで、研究テーマについて3回発表しましたが、発表の仕方から自分の研究方法まで1回目に比べて要領を得るようになったと自分では考えています。無論、研究が進むにつれ、知識の蓄積が足りないことが際立ってきます。これから、研究テーマに取り組むために、力を尽くしていこうと思います。

## A Year at Osaka University

特別聴講学生 日本語学 Würzburger Tobias  
交換留学生 (ドイツ ハイデルベルク大学)

Being an exchange student at Osaka University has proven very educational and interesting. Even though this is the second time I'm studying abroad in Japan, spending a year at a different university in a different city makes for a very different experience and it has allowed me to gain even more insight and familiarity with Japanese culture and society.

Coming to live in Japan again after several years took some getting used to, but thanks to the help and advice offered by the University staff, all organizational matters were dealt with quickly and smoothly.

As one of Japan's leading educational institutions, Osaka University naturally offers a wide array of lectures and classes, which are not only interesting for teaching academic knowledge and skills, but also offer fascinating insights into Japanese everyday life to foreign students. It probably goes without saying that engaging in classes here will teach you a lot, that you just couldn't learn any other way.

Apart from this, Osaka University offers many opportunities for exchange students and Japanese students to meet, socialize and exchange ideas and the university creates a very open atmosphere. While taking classes on Japanese cultural aspects and language at a Japanese university can give you new perspectives on these issues that differ from the ones you get at your university at home, it is this kind of direct exchange with other people that is, in my opinion, the most valuable aspect of studying abroad. And since Osaka University puts a lot of effort into promoting student exchange programs, you will not only meet Japanese students, but other exchange students from around the world, which really broadens your horizon.

I live in the Seimei Dormitory, right next to Toyonaka Campus. It's an all-male dormitory with both Japanese and international students.

Sharing many of the building's facilities offers many opportunities to get to know the other residents, but everyone is also very respectful of each others' privacy and there have never been any complaints about, for example, people being noisy late at night. All in all it is a very positive living experience, that is both affordable and, due to its location, very convenient.

And of course just being in Osaka has many advantages. While the area around Toyonaka Campus is fairly quiet, places like Umeda and Namba are very easy to reach, and one can quickly and cheaply travel to Kyoto, Nara and other cities that are interesting to visit at different times around the year. This has been convenient for myself, as I can easily visit friends I know from my previous stay in Japan, but will also be a great bonus for anyone who comes to Japan for the first time.

For the remainder of my stay, I intend to make use of Osaka University's broad range of classes to improve my Japanese language proficiency in multiple fields, such as Business Japanese.

All in all I can only recommend to anyone who is interested in getting to know Japan, its culture and language, to come to Osaka.



Tempozan Ferris Wheel in Osaka





留学生受入れ (2015年4月から2016年3月までの在籍。OUSSEP・Maple参加者は除く。)

研究科		学部		出身国・地域			
博士後期課程3年	14	4年	4	中国	61	イラン	1
博士後期課程2年	10	3年	4	韓国	45	オーストラリア	1
博士後期課程1年	10	2年	7	台湾	14	オランダ	1
博士前期課程2年	13	1年	4	ドイツ	8	カナダ	1
博士前期課程1年	14	研究生	29	ロシア	6	スイス	1
修士課程2年	1	特別聴講学生	22	アメリカ	3	タイ	1
修士課程1年	1			スウェーデン	3	日本	1
研究生	9			インド	2	ニュージーランド	1
特別研究学生	4			ブルガリア	2	ブラジル	1
特別聴講学生	16			フランス	2	ポスニア・ヘルツェゴビナ	1
				アルゼンチン	1	メキシコ	1
				イギリス	1	リトアニア	1
				イタリア	1		

在籍専門分野・コース、専修

研究科						学部			
専門分野・コース	博士後期	博士前期・修士	研究生	特別研究学生	特別聴講学生	専修	学部	研究生	特別聴講学生
哲学哲学史					3	哲学・思想文化学		1	
現代思想文化学		1	1						
臨床哲学	1					倫理学	2	1	1
日本史学		3				日本史学	1		
東洋史学		4	1			東洋史学	1	3	
考古学	2					考古学			
日本学	7	1				日本学	5	1	2
人文地理学	1					人文地理学		2	
日本語学	7	6			3	日本語学	1	10	8
日本文学	4	4	4	1	2	日本文学	1	4	5
国語学	4		1	1		国語学		5	
比較文学	2	2				比較文学	1		
中国文学	1	1		1		中国文学	1		1
英米文学					1	英米文学・英語学	1		
美学	1	3				美学	1		4
音楽学		1				音楽学・演劇学			1
演劇学	2		1						
美術史学	2	1	1			美術史学			
言語生態論	—					言語生態論*	—	—	—
アート・メディア論	—	1				アート・メディア論*	—	1	—
文学環境論	—	1		1	1	文学環境論*	—	1	—
その他	—	—	—	—	6	未配属	4		
	34	29	9	4	16		19	29	22

\*大学院のコースにつき、学部での専修なし。受入れは学部研究生のみ。

## 教員派遣・受入れのデータ

### 教員海外出張・研修 (2016年2月1日付)

海外出張 延べ114名、123件

中国・香港	25	韓国	9	オーストラリア、オランダ スウェーデン、デンマーク フィンランド、フランス ベトナム、ポルトガル ルーマニア	各2	インド、オーストリア クロアチア、スペイン スロバキア、トルコ ペルー、ロシア	各1
ドイツ	16	イタリア、台湾	4				
イギリス	11	シンガポール、タイ					
アメリカ	10	チェコ、ラオス	3				

海外研修 延べ17名、18件

アメリカ	3	ドイツ	1	スペイン	1	ロシア	1
韓国	3	インド	1	スロバキア	1	ドイツ	1
イギリス	2	オーストリア	1	トルコ	1		
ドイツ	2	クロアチア	1	ペルー	1		

### 外国人招へい研究員の受入れ (2015年4月から2016年3月)

- 張 麗静 (Zhang Lijing) 中国 2013年4月1日～2016年3月31日  
谷崎潤一郎作品の研究 (出原隆俊教授受入れ)
- Mohammad Moinuddin インド 2013年4月1日～2015年6月22日  
志賀直哉作品研究 (出原隆俊教授)
- Arokay Judit ハンガリー 2015年4月7日～2015年4月16日  
日本における翻訳方法の文化史:「文化の翻訳」の理論的考察
- 黄 小珠 (Kou Syouzyu) 中国 2015年9月1日～2016年8月31日  
五山文学における蘇軾詩の受容に関する研究 (浅見洋二教授受入れ)
- 章 羽紅 (Zhang Yuhong) 中国 2015年7月28日～2015年8月21日  
日本のマスメディアが報道する中国について資料収集を行う (金水敏教授受入れ)
- 楊 理論 (Yang Lilun) 中国 2015年8月20日～2016年8月19日  
日本の詩話における宋代詩学の受容に関する研究 (浅見洋二教授受入れ)
- 駱 曉倩 (Luo Xiaoqian) 中国 2015年8月20日～2016年8月19日  
日本伝存資料による宋代文学に関する研究 (浅見洋二教授受入れ)
- Asier Altuna-Garcia de Salazar スペイン 2015年7月7日～2015年7月23日  
英語圏文学の比較研究と、エラスムス計画の現状・課題の検討
- 柴谷 方良 (Shibatani Masayoshi) 日本 2015年4月24日～2016年3月31日  
準体法研究を中心とした機能文法理論の新展開 (鄭聖汝講師受入れ)
- 朴 美賢 (Park Mihyun) 韓国 2015年10月1日～2016年8月31日  
日本書紀関連文獻における韓国系固有名詞のアクセントの研究 (岡島昭浩教授受入れ)
- Poleshchuk Irina ベラルーシ 2015年5月2日～2015年5月29日  
フェミニスト現象学に関する研究 (浜渦辰二教授受入れ)
- 範 玉梅 (Fan Yumei) 中国 2015年9月1日～2016年8月31日  
日本語教育研究における質的アプローチについての研究 (青木直子教授受入れ)
- Knautd Till ドイツ 2015年9月28日～2015年10月12日  
近代日本史に関する調査研究 (伊東信宏教授受入れ)
- Merida Tarik ドイツ、フランス 2015年11月1日～2016年4月30日  
20世紀転換期における在米日本人移民の人種アイデンティティ形成に関する研究 (中野耕太郎教授受入れ)
- 鄭 毅 (Zheng Yi) 中国 2015年12月1日～2016年2月29日  
戦後日本における戦争の記憶と歴史認識 (川村邦光教授受入れ)
- Mocci Nicola イタリア 2016年2月13日～2016年4月14日  
東南アジア史における西洋普遍史の需要に関する研究 (竹中亨教授受入れ)
- 石 玉芳 (Seki Gyoku Ho) 中国 2016年2月15日～2016年8月15日  
樋口一葉及びその作品に関する研究 (出原隆俊教授受入れ)



国際連携室 Facebook

<https://www.facebook.com/IROGSLOU>

---

編集・発行 文学部・文学研究科 国際連携室  
青木直子・西田充穂・内田多鶴  
発行日 2016年3月31日

〒560-8532 豊中市待兼山町1-5

---